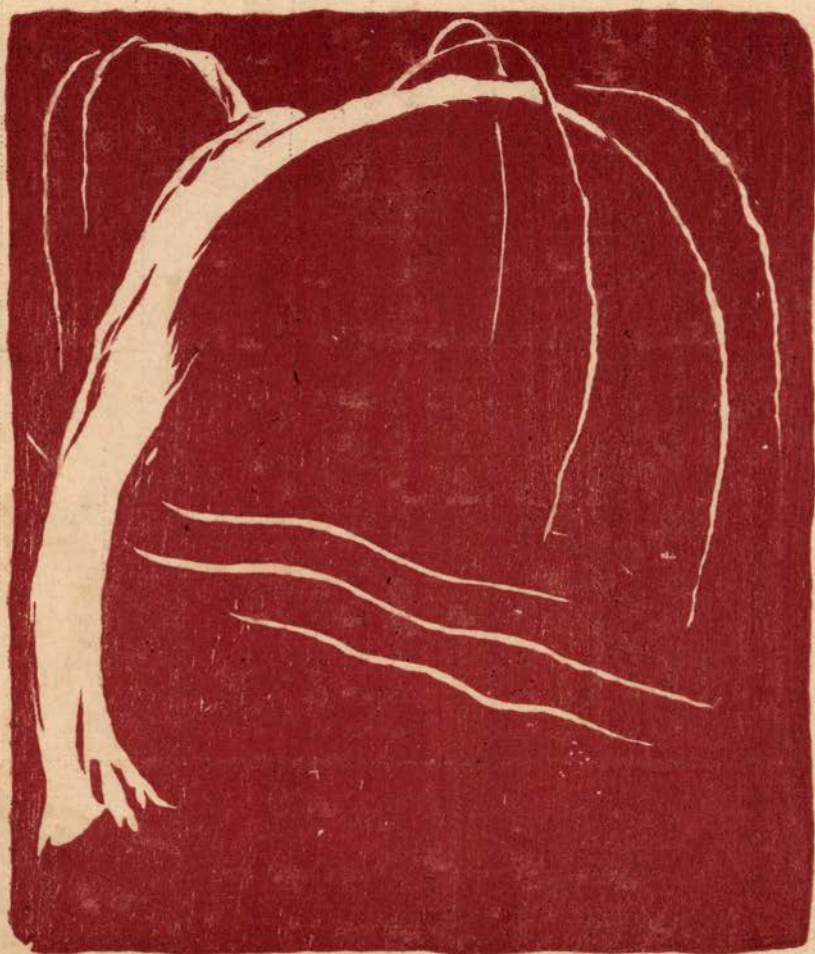


(行發日五十月一年每) 可認物便郵碼三第自三月三年三十正大
行 發 日五十月三年三十正大 刷 印 日十月三年三十正大

川柳雜誌

號 月 參



川柳雜誌三月號 (大正十三年三月十五日發行) 目次

金熊寺から砂川へ

(吟行記念寫真)

近作

一句を遺せ

本社創立川柳大會

創刊號を讀みて

近作柳樽

日本は狭い

川柳雜吟の作り方

募集句

妹

日向

精進

難句に就て

川柳塔

編輯太與里

麻生路郎 (一)

麻生路郎 (三)

竹田蘆穂記 (四)

法學博士 末弘嚴太郎 (一〇)

路郎選 (一〇)

西垣松雨 (一〇)

遅日莊主人 (一〇)

淺井五葉選 (一)

本田溪花坊選 (一)

吉川啞人共選 (一)

竹田蘆穂 (一)

元以交吟社募集吟 (一)

第七支部句會 (松雨記) (一)

路郎生 (一)

同人 (一)

無線電話 (一)

▲元神戶柳影草會小集吟 (一)

▲元神戶第八支部聯合句會 (一)

▲洲記 (一)

▲豆まきの日 (一)

▲元以交吟社募集吟 (一)

金熊寺の砂川へ



二月十八日第三支部主催の下に觀梅吟行があつた。金熊寺...目
 千本に於て一同記念撮影をした。(雲骨生)
 (寫眞説明) 前列向つて右より一聲氏 柳伴氏 芦穂氏 松雨氏
 路郎先生 松耶氏 淺花坊氏 幽香氏 雲骨 右平氏

後列右より 光太權氏 かほる氏 千代二氏 古城山氏 雲川氏
 啞人氏 春坊氏 羅翠氏 二柳子氏 (本社寫眞部漢互氏撮影)



近作

麻生路郎

初戀も知らず博士は嫁をさり
古本を賣つて二階の暇どひ
叱らずにすませたことを恩にきせ
さう聞けば似てゐないのがほんまかな
取引所のやうに雀は喋りたて
親展さ書いて炬燵で封を締め
かたつむりやうく峠越したさこ
貰はれて来たさは小猫知らぬなり
血を見ずに夢は我家の人さなり
ひすてりいおさへるための庭いじり



一句を遺せ

麻生路郎

北齋といふ人が、浮世繪風景畫の先驅者であることは私の説
明を俟つまでもなく、先刻御承知のことと存じます。

この北齋が、何故世界的藝術家であるゴッホも多くの共通
點があるまで、激賞されるやうな偉大な藝術家になつたかこ
申しますと、それは自己の藝術に對して非常に眞剣であり、し
かも彼自身の修養と努力が尋常の苦心でなかつたこと云ふことが
北齋をして今日の名をなされたのであると思ひます。

彼の生活は生涯を通じて實に慘澹たるものであつたにもかゝ
はらず、彼は彼自身の個性に隨つた觀方と工夫によつてあくま
で突き進んだのであります。如何に彼が彼自身の藝術に對して
尋常でない苦心を拂つたかは、彼自身の作品が時として、苦澁

な感を伴ふほど嚴肅な筆致であつたことによつて看取すること
が出来ます。彼は構圖や設色において實に大膽でありました。
しかし一面においてはなかなか細心なものがありません。そし
て、一筆をもちゆるかせにしてゐないのであります。即ち彼は自
己の藝術に對して少しもごまかしといふものがなかつたのであ
ります。

彼は自分の觀方に隨つて、あくまでも眞を得やうとした、そ
の謹嚴な態度は此の畫家にまつて著しくあらはれて居ります。
彼は眞を掴むといふことにおいて全力を注いだのであります。
私達川柳家にまつても、彼のこの態度によつて進んだならば
假令、現在におきまして、苦澁な感を伴ふ句をつくつてゐるこ

いたしましても何時か知識者に認められるやうな句の完成期に達することが出来るのであります。

明治三十七年以來、作句に苦しんで来た私にも、未だ、眞に後世に遺して、はぢないやうな句は一句も出来てゐないのであります。二十年の句の中から自分で捨てかねる句を選び抜けば或は十句位はあるかも知れません。けれども識者に見せれば一顧の價値もないかも知れないのであります。しかし私は川柳を棄得ないのであります。それは私の生命を永久に傳へるものは川柳の外にないと思ふからであります。

私は、北齋が如何に自己の藝術のために全力を注いだかをかつて讀んだことがあります。

彼の苦心に對する挿話としては、彼の一門人が、その習技の未熟なるを歎じて筆を投げんさいいたしました際に、北齋の娘はその門人に對して笑ひながら「我父（北齋）は幼年より八十有餘歳の今日にいたるまで、日夜筆を探らざることをなし、然るに過ぐる日、猶腕を組て『余は實に猫一疋をも書くこと能はず』とて落涙し、自ら其書の意の如く「らざるを歎息せり」と云つて勵ましたさうであります。

この言葉によつて見ましても北齋は八十幾歳の老年になつても、猶ほ絶えず藝術的良心の下に此の刻苦をつづけて行つたのであります。彼は人物の解剖學的知識を得んがためには接骨

術の名醫のところにまで通つたさうであります。私達川柳家にも常にこの心がけがあつて欲しいのであります。

嘉永二年の四月十八日に彼は年九十で此の世を去りました。

しかし、死する時に北齋は「若し天が我に十年の命を長うせしめたら、眞正の畫家になるを得たであらう、否五年永りしたならば」云つたさうであります。

現代の川柳家の多くは、後世の識者を俟たず、團子細工に等しき拙惡な句ばかり作つております。いや私もその一人であります。

畏友小出檜重氏が、まだ有名でなかつた頃に私に對して「僕は死ぬまでたつた一枚でいゝから立派な畫を描いて死たい」と語つたことがありました。そして彼は有名になることを非常におそれ居りましたが遂に二科の審査員までなつても彼は矢張り昔の彼であるところに、彼の偉いところがあるのだらうと常に敬服して居る次第であります。

私も又小さな川柳に、甘んじてゐないで、せめて一句でも後世の識者に示しうるやうな立派な川柳を遺しておきたいと思つて居ります。本誌の讀者におかれましても第二の北齋になつて後世に遺し得る一句のために力作せられたいのであります。

(三月二日夜二時過)

本社創立川柳大會

一月十九日午後五時開會
於大阪南堀江書林俱樂部

西横堀に面した何さなく氣持のいい、書林俱樂部の大廣間で本社創立句會を開催した。定刻前から同好者がさしく、つめかけて来た。その中に交つて同人二十余名の頭が路郎先生を中心にしてズラリ並ぶ。誰の顔にも言ひ合はしたやうに得意な希望に満ちた喜びの色が漂ふてゐた。やがて出題される、暫らくにして句箋が机上に山積まれた。披露をする。活發な共鳴の聲がこだる。階下で開いてゐる本屋さんの競賣の聲も合して興味津々たるものがあつた。誰かこつちは趣味の聲あつち生活の叫びだ、ミ洒落て一座を哄笑せしめた。盛會裡に十一時過ぎ散會。當夜の出席者は左の諸氏であつた。(吉穂記)

路郎、水府、溪花坊、茂男、白露、一聲、零骨、蛸天、柳骨、薰石、剛山、廣奴、松雨、凡平、梅風、花坂、千代二、松郎、文久、麥郎、歌津美、雅幽、波郎、小太郎、竹人、光太樓、かほる、夢路、百石、天海、順三、蹄一、蝶一、子行、駒人、囚蝶、大頭、萬葉、助六、徹底郎、紋太、史風、彩峰、六角、右平、飛水、幸堂、猪太郎、光郎、舟人、輝翠、不盡、二柳子、古城山、啞人、若穂(以上五十六名)

鶴
金砂子鶴を一びき飛ばすなり
振向く鶴シャツターの音を聞
折鶴は一遍呼吸をついて吹き
鶴の一聲で賞與が決まるなり
嘴へ鶴結んだやうに成り
講の會で南水早い鶴を書き
折鶴に頭がすれる小料理屋

光郎
夢路
歌津美
馬行
茂男
舟人
溪花坊
不細工な鶴を畫いてる二年生
叱られた様に縮まる鶴の首
上機嫌庭の鶴まで煙を吐き
後樂園鶴繪のやうに見て廻り
結立に鶴の首はさ延ばして見
動物園標本のやうに鶴は立ち
噴水に風が變つて鶴が逆け
一聲も啼かずに鶴は陽に當り

天海
六角
紋太
囚蝶
一聲
二柳子
芦穂
幸堂
入學に鶴龜算が一つあり
千圓の鶴が來たきて招かれる
折鶴の仕方に姉が呼び出され
喰い飽いた鶴片足で立つてる
千羽鶴數へて行けば眼が疲れ
折鶴に姉は口紅解いて呉れ
噴水で公園らしく見
檻を出た騒ぎに鶴の餌を忘れ

葛葉
史風
大頭
光太樓
泰平樂
八天子
柳童
暮朗

日曜日鶴はたいぎに餌を拾ひ
折紙で折つた鶴には足が無く
公園の鶴の音知つて居り
折鶴が舞妓の手にも一つ出来
弟はいつも肥つた鶴を書き
鶴の檻細い流れも無駄にせず
お使ひを帛紗の鶴にチト待
折鶴へ蠅入れてゐる日は長し
月並の鶴を書いこく居候
箱庭に片足折れた鶴が立ち
別荘で寝た夜天井の鶴を見る
鶴見せて乳母は両手を叩か

佳吟

折鶴の一時に動く窓が開き
鶴の居る家で痺を切らすなり
鶴が来て以来名所の一つなり
今橋を走る車に鶴が見ね
飾ひ幾何ならずして鶴は逝き
泉水の深さは鶴が来てわかり
小謠こ戯を鶴の聞き馴れる
繪で見も鶴も飛んでる二重橋

悟郎 小人 久樂 輝翠 南耕 助六 同 同 松郎 同 同 長人 同 悟郎 花城 梢露 凡平 百石 徹底郎 蹄二 駒人

鶴の方へ大工が散らす鉋屑
鶴曰くもう目出度さに飽きた
一杯をあさるに鶴は立つた儘
飼鶴の寫真へ子供寫つてる
病人は鶴が動いて風を知り
松あり水あり鶴遊んでる
鱈喰ふ鶴は火箸で挟むやう
うなづいてゐるかに鶴は歩出
鶴の首猿の人氣にかはらず
本物も影もおんなじ鶴の首
行末を案じるやうに鶴は立ち
今日は又わらい埃ミ鶴思ひ
女の子 岸本水府選

小太郎 舟人 稚幽 史風 光太樓 紋太 竹人 水府 同 路郎 同 竹人 凡人 蝶二 順三 蜻天 輝翠 舟人

道問へば流石優しい女の子
櫛を持つ事も覺けた女の子
巾着へ入れて持つてる女の子
流石女の子ですごい間に合はせ
女の子矢つ張り母の姿なり
女の子末樂もしい鼻を持ち
見習ふてませた口利く妾の子
ジャン拳チト手間が要る女の子
十四五に見わる十二の女の子
女の子男の連れに拗ねて見る
女の子母のお化粧ちつみ見る
櫛古屋の格子欄んだ女の子
女の子何思ふたか門へ立ち
女の子今日のゆもじを見に来る
女の子やがては恥しい姿
女の子怖い話を聞きたがり
女の子囁やくやうに話し合ひ
針に糸通す手付も女の子
女の子地唄の端を覺へて来
鳥の内女が出来て喜ばれ
見せ物を見て泣いてゐる女の子

子行 光郎 花城 松雨 啞人 幸堂 路郎 波郎 紋太郎 松郎 茂男 彩峰 同 夢路 同 囚蝶 同 溪花坊 同 古城山

(十客)女の子一人が来る一人去に

大頭

子澤山あすの休を奈良ミ決め

千代二

(天)寶塚子持同志の長廊下

水府

嫁はん云はれて怒る女の子

舟人

長々ミ國へ子持の便りなり

文久

綿入の子を知らぬ人抱て呉れ

小太郎

男湯の櫓が届かぬ女の子

葛葉

子澤山子に使はれる年に成り

路郎

綿入へ手を通さずに死にまじ

六角

三越にしようせがむ女の子

蹄二

兒の出来た家へ子供を連れて来る

光太樓

綿入は足が痺れた事を知り

大頭

女の子に任せて女夫連れ来る

路郎

子持だ云は皆んな顔を見る

竹人

綿入の綿大島さうなづかれ

水府

紫ミ赤で育つた女の子

文久

子を御近所の子供の名

松郎

綿人が潜りの釘にひつかかり

順三

女の子またけぬ程の水溜り

剛山

一杯は餘分に子持勤められ

松雨

綿人を持つて子守の親が来る

幸堂

吳服屋が来る女の子は覗き

右平

もう子持で格好混せて云ひ

波郎

別荘へ来て綿入の日がつき

松郎

繩飛びに一人は止める女の子

蝶二

懺悔した様に子の事を云ひ

花城

綿人を着るミ腰帶短か過ぎ

凡平

お火鉢を二人がりの女の子

光郎

タキシードへ子供のを爲て手舉り

夢路

風邪ひき綿入は急がれる

右平

(五客)女の子お火を起し

小太郎

子を連乗る電車席があき

水府

綿入の綿吹き出てる親旦那

百石

女の子あの子に負た袖を噛み

芦穂

鱈鮓屋の機轉子持 猪口を添へ

凡平

綿入を脱げば瘦せてる男なり

波郎

町内で指折る程の女の子

剛山

誘ひ手へ少し遅れた子持なり

芦穂

綿入の寫真は覆が小さくなり

竹人

女の子何にも成らぬ嘘を吐き

同

終點へ着いて子持の忙がしき

舟人

赤ん坊の手は綿入に延びた儘

薰石

(人)女の子疊ん紙を胸に見せ

小太郎

子のあるを隠した儘に落着ける

蹄二

綿入を着せたい母の心なり

文久

(地)溝迄は追って来た女の子

剛山

食堂の隅で子持に暇が要り

同

綿入を入れて息子の氣に入ず

文久

(天)女の子不平を長い袖に見せ

芦穂

茶碗蒸し子持の客にさるなり

小太郎

襦袢をいれて息子の氣に入ず

文久

子持

相元紋太選

満員車子持終りに降りて来る

同

綿入の旦那は細い向ふ脛

文久

女湯に子持ばかりの賑やかさ

天海

人葬式に子持の姉が一人

芦穂

掲げて見て此綿入の重いこ

文久

他所行を子持の方が大儀がり

右平

光太樓

光太樓

彩峰

松雨

綿入 本出溪花坊選

綿人の膝を猫よく叩つてゐる
夢路

純びへ覗いた綿をからかはれ
輝翠

綿入を買へば其冬短かすぎ
一聲

折角の綿入なので息子着る
光太樓

綿入が裾かたまる男の子
飛水

まんまるく成つ綿入叩かれる
二柳子

零落れた春に綿入裾が切れ
雅幽

銀婚の二人綿入着て寫し
芦穂

綿入に馴れる息子の震直さ
古城山

金持を布子に見せた太りやう
路郎

綿入に着替へて肩の凝つた晩
蹄二

本服に着ら綿入は重た過ぎ
蝶二

綿入を叩けば埃立つ天氣
花城

綿入の裾を濡らした上り口
同人

(人)綿入で来たのを侮む魔法瓶
啞人

(地)綿入で旦那非常に肩凝り
紋太

(天)綿入の裾吊上げる造り物
水府

質受は綿入だけの嵩にして

松葉杖

裏山へ今日も来てゐる松葉杖

松葉杖今更の様に見返られ
不盡

松葉杖又親切な人に逢ひ
順三

恩給に淋しく生きる松葉杖
茂男

割引の電車に一人松葉杖
かほる

松葉杖我々の年三較べて見
徹底郎

松葉杖庭にもたせて雨天なり
史風

小學へ招待された松葉杖
飛水

格子越話して歸る松葉杖
蝶二

逢ふ度に聞けうるさい松葉杖
啞人

松葉杖其後の経過訊かれてる
輝翠

松葉杖子供知らずに振り廻り
一聲

松葉杖笑つた方へ一寸むき
助六

松葉杖ミ一緒に居つて疲れる
光郎

松葉杖妻も短簞位かき
路郎

松葉杖招待席の横へたち
葛葉

一本を休めて話す松葉杖
雅幽

松葉杖其隣間を忘れかね
同

眞すぐに歩けば痛む松葉杖
文久

日向から日向へ戻る松葉杖
同

松葉杖問へば金鶏も持て居り
剛山

征露丸賣る松葉杖同情され
同

松葉杖手に觸れてゾツツ
蛸天

松葉杖漆冷たく光つてる
同

かくれんぼ松葉杖も寂しさう
同

雑踏を後から見る松葉杖
同

自轉車が来て松葉杖ぢつと
同

松葉杖我家の外で伸びをする
同

松葉杖自轉車のピラ散つ来る
同

松葉杖米やの値段見て歸り
同

松葉杖も出て来た公園良い日和
同

切り口を平氣で見せた松葉杖
同

松葉杖ぶつから棒に戸を締る
同

松葉杖けふも長屋を出て了ひ
同

松葉杖いはれを聞けば涙ぐみ
同

此の村でいちつ賢い松葉杖
同

松葉杖一寸はしつて見せる也
同

片足を戦地へおいた松葉杖
同

通り庭丁稚は松葉杖をけり
同

松葉杖かひなの瘦が目立なり
同

よう命あつたき松葉杖をつき
同

同

蛸天

同

同

同

波郎

同

幸堂

同

凡平

同

子行

同

右平

同

梅風

同

大頭

同

光太樓

松葉杖をついて立話
 松葉杖風呂屋の庭がタツつかせ
 松葉杖ドービーを開ける也
 松葉杖バナ、の皮を遊て行き
 松葉杖あだ名の方がよく通り
 世を捨て、から松葉杖弱り
 氏神を手前でおがむ松葉杖
 松葉杖のつびきな、用に出る
 松葉杖一丁毎に息を入れ
 松葉杖満員電車に席があり
 松葉杖あきらめ懼い足を見せ
 松葉杖の人を見送る下足番
 松葉杖溝があるのを心得る
 松葉杖生田春月ばかり讀み
 人道を車道の外の松葉杖
 演壇に少しも見せぬ松葉杖
 わが影のあまり淋しい松葉杖

彩峰
 同 夢路
 同 古城山
 同 芦穂
 同 百石
 同 舟人
 同 水府
 同 葛葉
 一 聲

樽据へて待つ友達のおそい也
 船唄に酒樽たぶん、ゆれ
 四斗樽の鏡をぬいた近い火車
 譯もなく酒樽が空七五三の内
 菰樽はやわらかそうに思わ
 空樽を二つ重ねて羽子が取れ
 腕ぱくへ水掛け乍ら樽洗ひ
 呑み口を亭主二三度しめ直し
 ころばした樽面白く動くなり
 樽ぬきの柿遊い儘街へ出る
 樽拾ひから出世だ云ふ酒屋
 樽持ちの誰はばか、伊勢音頭
 四斗樽を二つ構へて春を待ち
 酒樽を背に乾兒は酔ふて居る
 封印が派出な目出度い樽を積
 酒樽の眞上に稻荷の灯がこも
 四斗樽で持つて來い飲みて也
 空樽へ積物入れる新世帯
 空樽を提るに逃ける油むし
 樽の口太く出て又細くなり
 音のする樽を叩いて用を聞き

因蝶
 歌津美
 天海
 百石
 かほる
 飛水
 蝶二
 幸堂
 波郎
 剛山
 二柳子
 松雨
 啞人
 古城山
 文久
 同 白露
 同 竹人
 同 右平

親分の土間一杯にこも包み
 空樽を見付た紙屑屋が這入り
 底拔の樽の始末がまだつかず
 繩納簾樽すく、れにくる也
 秋晴の音がします酒の樽
 角樽の魚を邪魔なものにする
 積のるに積ん未買ふ氣の樽屋
 かくれんぼ一人は樽の中へ出
 空樽の底に残つたかなな屑
 來年は四斗樽据て呑むつもり
 四斗樽が空く迄仕事手に付す
 樽の上小僧鳥打帽を置き
 菰樽によく突當るお手傳ひ
 親方の氣性は樽の酒を置き
 前掛の白さ呑み口斜に抜き
 集金に行つて見て來た灘の樽
 菰樽が門から見へる新世帯
 たゝか、樽は中味を見透され
 コツ酒樽の中から樽をより
 半樽へ亭主の力借りに來る
 團體の中に一人は樽を提け

同 夢路
 同 蛸天
 同 彩峰
 同 光郎
 同 凡平
 同 小太郎
 同 徹底郎
 同 松郎
 同 大頭
 同 輝翠
 同



創刊號を讀みて

末弘 巖太郎

川柳雜誌創刊號を送り下さつて誠に難有く存じます。

御説至極面白く拜見しました。殊に終りの部分に於て「川柳が徳川の専制時代に庶

民の聲として生れたことは事實である(中略)けれどもそうした境地から詠まれた川

柳は時の流れと共に一つの文藝として生命を把持して來たことも認めていたゞかねば

ならぬ」と言つて居らるゝ點を面白く思ひました。その點に於ては先日大毎の「屋

上庭園」で久良岐氏が小生の説を以て不當なりと川柳の中徳川時代の暴政を自身

を皮肉つたものは寧ろ少いと言はれて居るのは寧ろ見當がはづれて居るやうに思はれ

ます川柳が専制時代に於ける庶民の「空氣」の中から生れたと言ふことは川柳のすべ

てが専制政治に對する皮肉を内容としてゐる言ふを意味するものでないことは言ふま

でもありませぬ。あゝした「空氣」から生れたものがその形式と氣持とを傳へつゝ特

殊の文藝となつた所に川柳の特色があると言ふことは誠にお説の通りだと思ひます。

所でこんなことを謂ふと如何にも川柳通のやうですが實を申すとお察しは全く

▲遲日莊偶會

高張

板圍ひ高張ばかり高く立て

人込を抜けて高張擔ぎ替へ

商店の名が高張に太すぎる

三越の高張火車を見通さず

板圍ひ越しに高張丈け動き

高張を持ち鉢巻のしまり過ぎ

高張を丁稚は起こしかねて居る

▲悟郎居小集

結婚

結婚式からそのまゝ、墓詣り

結婚に一の友達來て貰ひ

田舎からその結婚に口を出し

結婚に姉は甲斐くしさを見え

結婚の祝の紙をおかしがり

母親も結婚の日を白くぬり

強いられた結婚も早子が生れ

自動車の花嫁見てる懐手

結婚の日取り三趣聞き違ひ

二柳子

輝翠

同

徹底郎

同

芦穂

同

報

松郎

同

同

同

同

松雨

同

同

同

同

同

同

達して『川柳』に對して相當理解のある博士「處でなくお恥しながら現代の川柳を『研究』なき、頓こいたして居ないので。それで『明治大正の聖代に生れた吾々にはもう『川柳』に現はれたる如き輕きユーモアを鋭き皮肉を考へつくこゝが出来ない』云ふ言葉も決して現代人の『川柳』能力を否定する言葉にしてははなくそれ自身一の皮肉一のアイロニーにして輕くこつて頂きたいのです。この註文は無理でしやうか？小生は中學頃一時『俳句』にこつた事がありました。毎月雜誌『鬼杖』の出来るのを待ち焦れた時代もあつたかと思ふ私も年をこつたな言ふやうな氣がします。しかし生れが御尋常な爲め『川柳』の趣味なき、頓こ解せずして今日に及んだのです。處が縱令生れは御尋常でも愈よ世の中に出て見るこゝ、その世の中が頗る御尋常でない。その結果さう／＼皮肉になつて仕舞つて貴下が『既に大なる皮肉であり川柳である』と賞讃（？）されるやうな『暴政は人を皮肉ならしむ』をかけるやうになつたので世の中と言ふものはつく／＼恐ろしいものだと思つてます。

處で法律家の中にも中々川柳家は居ります。岡田朝太郎さんに至つては先刻御承知のこゝと思ひます。その外には毎日小生ミ机を列べて居る穂積重遠さん、之が中々川柳通にて時々川柳に關する教へを受けます。

法律家の皮肉を『川柳家』が眞面目に受取つて御評論下さつたこゝを心から喜びお禮のしるしに勝手なこゝを長々申述べました。（二月廿一日）

結婚さまで兩方の親は解け
あの人と濟まないながら結婚
花嫁の身に金屏風まぶし過ぎ
結婚で又考へる住居也

寒

寒風に提灯だけの牛蠅めし屋
輕業の足場がうごく寒の風

寒風 人にの子だけが通る橋

寒行はゆうべの辻を又曲り

寒行の一人は命拾ふた人

一日は國からも來た寒の餅

寒詣り念ざる事の深すぎる

外出を思ひこゞまる寒の入

出前持此大寒に鉢を割り

寒行に今日は船場へ足を向け

寒行で去年の家へ足を止め

寒明けに稻荷の鳥居赤くなり

寒念佛庭園はるかに灯がこも

寒行に出て 姑は風邪を引き

國からの手紙に困るぬくい寒

寒行へ鳥目白く光るなり

同 凡平

同 十字路

同 悟郎

同 溪花坊

同 同

同 松雨

同 同

同 百石

同 同

同 凡平

同 同

同 松郎

同 同

同 悟郎

同 同

同 十字路

井戸端を鶏を鶏と走り乍ら逃げ
 錠前によいかと手燭さしむける
 名物だけちと薄墨の通帳
 読みさしの本を抱へて鶏を追ひ
 親友さしては呆氣のない返事
 櫻茶屋臨時と言ふが酌いで呉れ
 いづ樂になるかと思ふ米をきぎ
 明暗をトふ如き竈の火
 オペラバッグだけの望みは叶へたり
 八階へ昇つて母は煙草にし
 懐がさむうて一人二人へり
 末の子に生れてあれもこれもいや
 はゞかりへ起きて炬燵の火をひろけ
 看板屋だんくたく書き終り
 許嫁黙つてるのが氣にかゝり
 男かこ駄目を押される長火鉢
 風呂敷に其處迄云ふ帯を締め
 通帳これだけ出すに手間が要り
 贅澤な庭は自然の川を入れ
 會社員進物用を値切つてる
 おばアさんよりもよつた盛り蜜柑

神戸 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

父親が呼べばハッキリハイミ立ち
 踏切の此處から下りたい町が見ね
 手まり唄調子がつく庭に落ち
 鰻の肉喰つて歸つた朝鮮語
 敷薬を流した様な杉丸太
 猿飛の奇岸挨拶してするよう
 乗り込みに花輪も積んで安來節
 出世したところを女房ゆり起し
 儲かるも又其上に慾がつき
 福引にない箆筒まで飾り立て
 先生は一寸頭を下けるだけ
 其儘にして出た炬燵氣にかゝり
 門松の砂はそこらへ撒き散らし
 ほんごうに飯を出すよお世辭言ひ
 電車来て奥さん見榮もなく走り
 思ひ切り後へ投げる洗ひ髪
 エプロンを着てなぐさみの鶏を飼ひ
 兄弟が寄つた記念に庭で撮り
 お庭拜見貰つて歸る程の世辭
 春の雨もつゝ寝てたい氣にも成
 生返事されて世話する氣がゆるみ

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

失つた匙が出て来る玩具箱
 波打つた様に板塀水を撒き
 夢に見たことを女房は云はぬなり
 さんな夢見てるか小兒又笑ひ
 運轉手アツと言ふたは饒いた夢
 褒められもせぬ別荘の廣大さ
 石鹼を落し十八番がやみ
 女教員若い氣のまゝ年を取り
 刈變へた當座の頭皆笑ひ
 分列にダンス仕込の足を見せ
 うらゝかに貨車を背中で押してゆき
 通さない着ものに通夜の灯は光り
 體裁に持つ小説の一冊
 ほつゝミ嫁にも普門品おしへ
 白煙汽車は枯野へ置いて行き
 有難い雨は彼の女の名を教へ
 かるた會抑へたまゝで意地を張り
 中筋を寶惠駕狭く通るなり

添削 初心者の爲に

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
峯	一笑	長人	十字路	一路	琴月	水月	弱法師	波郎	烟良雄	白柳子	千代二	柳骨
獨山子	夢遊	薰石	蘇人	水								
神戶	天下茶屋	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
大阪	京都	大阪	大阪	大阪	大阪	大阪	大阪	大阪	大阪	大阪	大阪	大阪

初心者の爲に此の欄を設けました。投句は五句以内に願ひま
 す。句稿は他の句稿と混同せぬこと——添削改作欄宛

日本は狭いな

松 雨

○ 梅田で會つた友達に千日で又あつた
 矢張り日本はせまいなア

○ 堺の親せきの五つになる兒に時間を問へば長い針がこつちやむきで短い針があつちやむきだこ

○ 門戸の厄神さんへ參詣した一人居並ぶ乞食を撃つてアツパレの乞食前だこ

○ 僕の兄は一寸酒がすきた。いゝ位呑んだ處へ又一本をすゝめるこ『いや／＼もう澤山だ逆もようのこさん』

○ 一杯機嫌で成處に行く『わらいわい色だんなア』『これは生れつきやがな』『おほらしい其んな紅い生れつきの顔がおまつかいな』『さきりの悪い人ぢや一杯呑んだら紅くなるのが生れつきやがな』

雑吟の作り方

選 日 莊 主 人

初心者からよくこんな質問を受けます
『課題吟は、さうにか作れるやうになり
ましたか雑吟は、さんご作れませんか』近
作柳梅』にも出来るだけ澤山句を送りた
いと思ひますが、なか／＼雑吟は思ふや
うに出来ません。さうしたら雑吟が出来
るやうになるのでせう』と。

これは尤もな質問であります。しかし
雑吟がうまく出来ないやうでは、ホント
の作家ではないのです。大體課題を設け
て句を作るさいふこごは、昨句の練習で
あつて、ホントの川柳には題なきのある
べき筈はないのです。その時／＼に感じ
たこごを川柳の形式で遺しておけばい
ので、所謂雑吟なるものはそれなのです
だからその人の雑吟には、その人の人生
観や社會観がハッキリ出てゐなければ

全く無意識な句になつてしまふのです。
けれども、最初は自然に、句が生れて
来るさいふこごは困難でありますから
雑吟を作らうと思ふ場合には、極く初歩
の人は自分に尤も近い課題を勝手に設け
て、作るより仕方がありますまい。世の
中のものは總て形式から這入つて行くこ
ごが便利であるからです。

それが樂に出来るやうになつたら今度
は、全く課題を離れて、自分の生活の寫
生に移るのです。

寫生で自己獨特の境地が描寫出来るや
うになれば、次に自分の思想を盛るこご
に腐心するやうにするのです。

そして明かに自分の簡性が出て來れば
立派な川柳家になれた譯です。

こゝまで來ねば、ホントの川柳家とい

ふ譯には行きません。
初心者は一時も早く模倣時代を去るこ
ごに苦心しなければ、何時まで經つても
川柳家にはなれません。

雑吟が立派に出来る人には、もう課題
吟の必要はありません。けれども内容に
ふさわしい叙法を探るためには常に課題
吟によつて、いろんな叙法の研究をして
おく必要はあります。絶えず古人の句を
讀んだり、作句をしたりすれば、自己の
盛らんこごする内容が自由に表現出来るか
らです。

本社三月例会

日時 廿三日午後六時

場所 大阪南區清水町
停留所西入端の坊

兼題 「心配」五句
麻生路郎選

會費 金貳拾錢

川柳雜誌社

募

集

句

妹

浅井五葉選

於露大樓居

弟は雨で妹と遊ぶなり
 妹をからかふだけの紺緋
 兄さんへきまりが悪い里歸り
 先生に妹のこゝで會へ行き
 不具の兄守つて一生嫁がぬ氣
 妹は矢の字に姉は太鼓なり
 妹の笑ふ寝顔に眩枕
 堪忍をしてこ妹はちゞこ
 ビンボンの妹に相手一人出来
 盗み目に見て妹は言ひ遊り
 しるこ屋を出る妹去ぬ積り
 子守する妹唄は出るがまゝ
 一階借女房さ違ひ妹なり
 妹を三人持つた細い腕
 心配の姉へ妹寄りかゝり
 妹の便りに母の意見なり
 妹が嗅いで内々骨を折る

順三 雅幽 句樂 凡平 千代二 彌生 秋葉 良雄 零骨 白柳子 助六 柳骨 山月 史風 囚蝶 薰石 青竹

無實から妹の年を尋ねられ
 母親の味方は妹唯一人
 妹も死んで師匠に惜しがら
 簪は國の妹へ土産なり
 妹の寫眞工場で驕がれる
 あば摺れの妹へ兄のかたい文
 白粉を唯眞白に塗る妹
 ウエータを妹にする不幸者
 妹にしては不審な口を利き
 妹も見様見真似で白く塗り
 妹は姉の都會に憧れて
 有島の主義の妹を持って除し
 勉強のこゝへ妹琴を出し
 妹の足をうつかり抓つたり
 妹の方へ母親肩を持ち
 言ひ甲斐もなく妹へ負てやり
 交際が少し姉より派手になり

一洲 同 一 同 錦山 同 水 彩霞 同 夢遊 同 梢露 同 輝翠 同 同

落籍こ決めて手頃な家がなし
 繩暖簾見て素道りの出来ぬ癖
 取り除ける石に力のありたけ
 噴水が止まり公園の夜が更け
 暖簾の眞ん中程が油染み
 落籍三決つて京から染屋が來
 落籍される話本當の年を云ひ
 噴水が風の合間に音を立て
 我一人胸に納めて無事に濟み
 立膝をして氣混れな艶布巾
 皺くちやに成て出て來る花名刺
 差し向ひ灰から石を探し出し
 菜の花の散る頃ヤツト床拂ひ
 抽斗をみんな曳出す風樂
 石段へ立つて住職寫される
 東だの西だの道を教へられ
 女房の無精拭巾へ茶を掛ける
 廻り道しても別れる時がなし

昔可 紫峯 木三 みぎり 一笑 光太樓 なまつ 紋太 彩霞 一閑子 春峯 露太樓 同 番翁 同 皎月 同 古城山

▲元神戸柳影草舎小集吟

タクシー

タクシーを降りて財布を一つ
相談の横をタクシー走り抜け
タクシーの中で氣兼ね二人
タクシーの舞妓袂を持って
タクシーの日那に女多過ぎる

松平 凡平 江間 十字路 悟郎

▲元以交吟社募集吟

拾 柳川洲助選

拾着る時候歩いて見たくなり
病上り半月早い拾着る
セルにきき拾にしようか女連
借着と拾に膝の無理が知れ
行丈が合ふ拾を寢間着にし
獨者かけがいのない拾なり
後から拾のふきへ難をつけ
着せるなり子は轉んでる初拾
セルの中俺いら一人が拾なり
カブリ付拾の汗を知つて居り
一三冬を越した拾の襟の垢
誰着るもなく拾着る頃になり

三風呂 彩峰 眠聲 千代二 助六 百石 輝翠 蝶二 同 徹底郎 句樂 清月

温室の日向の中を覗き込み
椽先が日向になつて洗ひ髪
日向ほこ出来さやうに樹に茂り
日向にて霜焼けを搔く日曜日
日向の日向へ鸚鵡釣るされる
物干の日向へ鸚鵡釣るされる
植木屋に今日も同じ陽が當り
日向ほこ植木の枯事も云ひ
母親は日向へ出して柄を撰り
子が破つた炬燵日向で張つて
青寫真さる間日向で爪を切り
背伸びした後で日向の猫を追
返答はしたが日向をまだ立て
終點を降りて日向の長い道

同 雅 幽 不 越 文 七 錦 山 波 郎 同 梢 露 獨 山 子 夢 遊 彩 霞 同 聲 眠 聲

ま、事で遊ぶ日向に塵を敷き
カーテンを捲きベッドへ陽が當り
うらゝかに日向の鹽光つてる
放免の其日日向のなつかしさ
(五客)お掃除の間日向出て座り
強い陽を浴びて熨板首を立て
川一つ向ふの村は陽が當り
寵愛の鉢は日向に持ち出され
日向ほこさうせ駄目さ云ふ男
(人)カーブから思案の外陽が當り
(地)輪替屋は日向に塵をきて歸
(天)靜物は日向へ向けた色にこなり

順 三 句 樂 水 徹 底 郎 輝 翠 凡 平 零 骨 松 雨 徹 底 郎 水 盜 泉

精 進

吉 川 人 共 選
竹 田 声 穂

ウエータの顔に忘れた精進日
精進へ友達か来て物足らず
精進もしてゐるやうに云ひ觸
精進の料理へ抹茶うち句ひ
精進も三代目には日を忘れ

選 山 月 助 六 不 越 夢 遊 薰 石

精進に家内すつかり靜かなり
箸持つてふと思ひ出す精進日
精進をして燈明に義理を立て
すき焼と精進小さくなつて居り
精進さ云ふ日餘儀ない客が
精進の膳に寂しい日が續き

一 聲 松 雨 零 骨 一 洲 白 柳 子 囚 蝶

精進を精進に見ぬ 山育ち
精進を破つて寺のムツキなり
精進をうっかり破る 花燈
精進に赤い襷があはれなり
命日さ知らず有屋磨ぎ込み
精進で膝もくずさず少し飲み
寺宿で鹽氣の足らぬ香の味
雲水の歸りいろはで飲直し
少し眼をはらして精進は来
家中が佛のような精進日
命日を楯に一人の妓は拗ねる
精進も慣れて願近くなり
（人）飯山で戴いて知る蕪の味
（地）眞四角に座り直してお精進
（天）命日が矢鱈多いけちな奴

輝翠 同 同 盗泉 句樂 彩霞 凡平 青竹 雅幽 徹底郎 順三 獨山子 盜泉 徹底郎 選六 助六 同 不越 夢遊 薰石 一聲

精進に家内の皆んな静かなり
寺は寺だけ雲水の御料理
精進へ夜泣は花を抜いた
すき焼精進小さくなつて居
精進云ふ日余議ない客が
精進をして生前の孝に替ね
命日さ知らず有屋かつぎこみ
精進に膝もくずさず少し呑み
精進の日は若旦那氣に入らず
魚屋は精進あけを知つて居り
精進に坊主一人は甘く飲み
精進にうっかり鱈三つちまひ
命日を楯に一人の妓は拗ねる
初年兵佛に濟まぬものを食い
（五谷）精進はなごころ願をかけ
精進をさせて片親涙ぐみ
精進の勝手やつぱりい匂ひ
雲水へ着に飽いた顔で来る
精進に剛れ満願の近くなり
（人）お精進その飯粒の白いこ
（地）諦めた頃に精進落ちの膳
（天）眞四角に座り直してお精進

同 松雨 一洲 同 白柳子 輝翠 句樂 彩霞 凡平 青竹 雅幽 徹底郎 松雨 盜泉 盜泉 順三 盜泉 盜泉

（佳）栗の實を拾寄宿舎へ届き
拾着た丁稚に句ふナフタリン
（人）獨者拾を出す 微が生ね
（地）素拾の意見を聞かせる
（天）ちこ早い拾は藥瓶を掲げ

▲作句帳から

八掛けの浅い娘氣に入らず
棧橋は拾に寒い風が吹き
演壇の博士耳打二度もうけ
嬉しさに母もあわてた里がへり
里がへりだん／＼森が近くなり
父親さ喧嘩息子は國を起ち
ちこ華美な柄を又着る春に
此の間の雨が残つた白の足袋
袖だけが見るには惜しい山櫻
お土産があるなと思ふ戸を
敷島を椽へ預けてかたい靴
葬式屋泣いてゐるのへ又尋ね
ステッキを學生叩く眞似で持
交換手白足袋纏いで穿いてる

松雨 助六 囚蝶 徹底郎 零骨 洲馬 同 路郎 二柳子 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

花嫁の雑巾がけは念が入り
 雑巾位繕へますこ娘の子
 ある筈の雑巾掛へ叱り付け
 鐵瓶がかへり雑巾呼び出され
 雑巾を絞らに腹の立つ女
 お出入へ雑巾の手を休めてる
 雑巾が凍つたこ云ふ寒さなり
 雑巾のまへ八百屋の荷を覗き
 雑巾を持つて仲居の枯すき
 雑巾を刺に氣質を伯母は見せ
 雑巾に嫁の不性が知れる也
 雑巾に見る敵娘の頭文字
 雑巾を亭主が持つこ丸くなり
 行儀見習雑巾を四つに折り
 寝過した朝雑巾の手を省き

先 妻(席題) 互 選
 駒句郎 水月 琴月 眠聲 數寸夢 春峯
 菅可 柳坊 一笑 一閑子 路郎 紫灯 南耕 錦城 輝翠 古城山 松郎 同 荈穂 同

先妻に逢へば綺麗になつてゐる
 先妻と道で出逢へば女中連れ
 友人に先の女房を譽められる
 先妻は田舎で仲居してゐる
 先妻の子は父親に行きたがり
 評判のいゝ先妻の後へ嫁き
 先妻のこころを遠縁だけが褒め
 先妻の兄は酔はない内に去に
 先妻の子は奉公をして育ち
 先妻の縫つた着物をジツと見る
 先妻へ少し氣兼ね髪の出來
 先妻と時々出逢ふ湯の歸り
 先妻の後姿に道を變へ
 先妻は先妻背の格氣なり
 先妻の子供女中の手を助け
 先妻は風邪をひかさぬ様頼み
 先妻の顔が長女にだけ残り
 先妻の身内ここれはくも也
 先妻と同じ病氣に氣が弱り
 先妻の方へ肩持つ近所なり
 近所まで来て先妻は子を案じ

艶笑 竹榮 清公子 青波 一聲 剛山 一閑子 荈穂 番翁 鶴太郎 輝翠 紫灯 綠三 幽香 柳坊 路郎 同 紋太 一笑 同

子を頼むゝ先妻死にました
 先妻が嫁し付いた事耳にする
 先妻の子は國元で育てられ
 先妻は苦勞しに來たッけの事
 先妻の事を子守にそつと訊き
 先妻の鏡壞れたまゝであり
 先妻の子は下女に馬鹿に
 先妻の子が美しく生れ付き
 先妻の癖髪結が來て話し
 家出してから先妻の子を知れ

白 湯(席題) 相元紋太選
 なまつ 同 錦城 同 南耕 同 皎月 同 春夫 同 同 清公子 幽香 皎月 夢奇痴 初蕾 輝翠 なまつ 荈穂 夢遊

先妻の事言ひ出して又揉める
 先妻の子の優等が氣に入らず
 先妻の方がましかこ母は云ひ
 小説家先妻のこころに取
 溜め違ふ時先妻も振り返り

水月 琴月 眠聲 數寸夢 春峯

先妻の顔が長女にだけ残り
 先妻の身内ここれはくも也
 先妻と同じ病氣に氣が弱り
 先妻の方へ肩持つ近所なり
 近所まで来て先妻は子を案じ

紋太 一笑 同

お白湯、構ひません居候
 鐵瓶の白湯其儘に母は呑み
 白湯汲で置い丸子の數を讀み
 酔醒へせんこ云ふ白湯を出し
 出し遊る十八番へ白湯を出し

夢遊

呑難い様にぐくりと白湯を呑み
 病上り白湯の方をこそ望する
 白湯でもう結構ですぞ酔客
 白湯で口焼いて流連腹を立て
 粉柴の時間お白湯を呼んで
 白湯を押し戴き酔ふた落語也
 良い聲が出る。文句を白湯に付
 去ぬま云ふ頃に漸く白湯が沸
 腹の立つすぐ其前に湯が沸り
 爛番の粗忽は白湯へまこほね
 薬呑む湯に鐵瓶へ手を當てる
 お助匠の前、白湯を差し上る
 白湯を戴くのも高座の姿なり
 三度目の白湯に粉柴元の顔
 白湯で宜しう友達の方を向き
 新世帯茶の葉の切れた盛續け
 (人)癖のよき平氣で白湯を呑
 (地)白湯を見詰めて粉柴の口を
 (天)酒臭い銅壺の白湯を呑

燈明(席題) 本田溪花坊選
 御燈しに煉けた阿彌陀如來也

彩霞 紫灯 駄句郎 古城山 溪花坊 同 琴月 同 春峯 同 苦可 同 松郎 同 路郎 同 剛山 同 なまづ

燈明をお出でお出で形で消し
 一燈の明りへ行者長う説き
 燈明の濟む頃爛が出来上り
 御詠歌の中に燈明細く成り
 燈明の事で養母云ひ募り
 粗忽にも燈明の灯を消し忘れ
 燈明に向ふて木魚叩かれる
 大晦日皆燈明の下で寝る
 お燈明上げて宵寝の床を敷き
 燈明に祈願の人の影が見へ
 いゝ事があつて燈明上げて
 燈明がまたく頃を淋しがり
 番僧が立つて燈明明くなり
 燈明で仁王の顔がすぐく見ぬ
 拗ねてるるやうに燈明付初め
 燈明と一緒に花も接ぎ足され
 おちよやんの手が燈明に届き兼
 便所への戸を燈明消わかり
 燈明の影へお神籤結ばれる
 燈明を目當に若い二人行き
 燈明の揺らめく度に閉させる

萬登 南耕 輝翠 一洲 清公子 弱法師 紫灯 芦穂 一閑子 水月 枝呂 皎月 苦可 櫻堂 夢遊 幽香 古城山 松郎 春峯 同 紋太

燈明がすつかり點いて有難し
 燈明を消して佛飯下けて來る
 燈明を上げるに何か云へて
 燈明に母は小さな語をのせ
 燈明も見物してる高野山
 お燈明お茶屋の晝を明く見せ
 お燈明勿體なくも風に消わ
 お燈明上げて旅の宿に着き
 (五客)燈明が並んで夜の賑し
 燈明を後見人ま云ふが點け
 燈明の影宿良の背へ映し
 常夜燈消ゆるのを見た朝歸り
 病人が燈明の消ゆる時を見る
 (人)親方が大いに見ゆるお燈明
 (地)異見、眼に燈明は白く見へ
 (天)燈明を等閑にする嫁で有

ナフキン(席題) 高橋古城山選

ナフキンを疊に女給洒落し出
 密談の中へナフキン置に來る
 ナフキンに樂書をして叱られる
 ナフキンをもう一枚酔顔

同 番翁 同 路郎 同 柳坊 同 同 二柳子 一閑子 芦穂 清公子 同 路郎 幽香 皎月 剛山 錦城 聲翠 同 駄句郎

冷かき只ナフキンを折つて居り
 ナフキンを折る袖口の赤い脇
 ナフキンで拭いて冷たい大理石
 生花のやうにナフキン卓へ載
 夜更の事ナフキンで親に知れ
 ナフキンへ誰か書たか戀の唄
 ナフキンで酔ふてる膝を拭て
 ナフキンを餘分に貰ふ風邪の氣味
 ナフキンを折にカチユーニ枯芒
 ナフキンに口紅が付化粧振り
 ナフキンへ流行唄を書て呉れ
 お替り来る間ナフキン擴りて見

番翁 春峯 柳坊 夢遊 弱法師 路郎 萬登 清公子 同 紫灯 同 同 幽香 溪花坊 初雷 春峯 馱句郎 松郎 二柳子 芦穂

お馴染の辭ナフキンの置ごころ
 ナフキンを小さく疊む女客
 ナフキンを折る傍へ椅子をよ
 子を連れて来てナフキンは足も也
 ナフキンに包んで歸る親心
 二千五百八十四年目の紀元節の午後六時
 三分前から梅田の明文堂で小集句會を開
 催した。遅くから麻生路郎先生、竹田蘆
 穂氏、橋本二柳子氏の顔が見わた。十一
 時過散會(松雨記)

同 路郎 柳坊 番翁 清公子

三味線 互 松雨

髭 麻生路郎選

叱つてる社長の方に髭がなし
 久し振ヤアヨウミ云ふ髭ミ髭
 卒業近く口髭のほしくなり
 少々の髭は氣にせぬ親旦那
 口入屋此の髭サンを持って除し

同 路郎 柳坊 番翁 清公子

三味線 互 松雨

第七支部句會

隣の噂も知らず三味を弾き
 一文にもならぬ門付糸を切り
 焼跡へもう料理屋の三味がな
 降り出して来て爪弾のはたき止

給仕 互 選

喫殺の葉巻を給仕つまんで見
 長距離の電話に給仕交代し
 應接をチラツミ給仕見て通り
 飛行家になる腹もある給仕也
 樂隊へ給仕カーテン高くあげ
 ストープへ遠く給仕は腰を
 優等で卒業をして給仕なり
 姉さんの事を給仕は尋ねられ
 月給を堅く給仕は握りしめ
 學帽の姿給仕ミ思はれず

煙草 同 悟郎 百石 松雨

煙草屋で聞ひ十二時廻つてる
 相談に聞いて煙草を吸ひ付る
 思案する煙草に又も手が伸る

同 悟郎 松雨

(二点)

(二点)

難句に就いて

路 郎 生

趣味本位の雑誌「變態知識」を東京支部の柳路氏から送つて来た。その一八頁に語彙附録「川柳研究階梯」の「丁難解百句答案」といふ長いタイトルの下に穂積博士親子三人の共同研究といふのが發表されてゐる。その筆頭に「一、二、これは『さるの驅込む』の誤記だらうと思ひます。誤記だすれば句意は明瞭にしてある。これだけでは原句の不明な讀者や僕には何のこゝか薩ッ張り判らない。川柳語彙が出た時に購めやうと思つてゐるが忙がしいので、ついそのまゝになつてゐるので僕にもその難解百句なるものが、どんな句であるか判らない。

そこで讀んで見たが一向興味も湧かねば、果して其の研究なるものが的確であるのか、さうだか判断の仕様もない。そこで大雑把に讀んで行つた。

ところが十九頁の中段に、

——(一、二)犬を捨て申をかつこむ松ケ岡

穂積先生の手記には「犬を捨てさるの驅込む松ケ岡」こある由、犬(夫)を捨て猿(妻)がさなつて句意明瞭——

こいふ記事がある。これは編者外骨先生?の筆になつたもので

ある。

これを讀んで、僕も「難解百句」の十二番目の難句が「犬を捨て申をかつこむ松ケ岡」こいふ句であることが明瞭した譯だしかし、僕は右の句を讀んで古句の研究こいふこゝに對して條件なしでは賛成出来兼ねると思つた。

こいふのは、穂積博士の御意見なものが、「さるの驅込む」の誤記だらう、誤記だすれば句意は明瞭

ミ勝手に訂正されて句意を明瞭にされてゐるからである。

原本は「を」が「の」になつてゐるからミか、原本は「を」になつてゐるが作者の手控へには「の」になつてゐるから原本を作るまきに筆稿の誤りであるかも知れぬミ云はれれば成る程そんなものですかさうなづける譯であるが、右に述べられたやうな御意見では文珠の智慧ミはうけりかねるやうに思ふ。それを又、穂積先生の手記には「犬を捨てさるの驅込む松ケ岡」こある由ミ、云ふ頼りないものを頼りこして、句意明瞭なきミたちこゝろに解決を與へてゐられる編者外骨先生にも同じかねる。

原作者の手記なら、イザ知らず穂積先生の手記では、甚だ失禮な申分なれども、その證査にはならぬと思ひます。

難句研究が謎々を解くやうに單なる箇人の趣味であれば兎も角(この雑誌は趣味本位ミは銘打つてあるけれども)額をあつ

められての御研究だミすれば、もう少し慎重な態度であつていたゞきたい。

右の御研究が、博士御自身から云へば、食後の林檎を召あがる位のものかも知れませぬが、世間では決して、さうは解釋して呉れませぬ。

後人が更にこの句にぶつつかつた時に、必ずや『變態智識』第一號の十八頁に、穂積博士は斯う述べてゐられる。そして編者外骨先生も又、これに裏書してゐられるではないかといふであらう。甚失禮ではあるが李兵衛や田吾作の研究でないだけに之れだけのこゝを云つて置かねばならないのである。

私は古句の難句に對しては斯ういふ意見をもつてゐる。

川柳の難句なる句は川柳としての生命の短い句なのである。そして、その句の價値は時代を超越出来ないところに減じて行くのであつて、さうした句を研究することは、餘程閑のある人で、謎を解き得たこゝに満足し得る人か、その時代を研究する人達の副産物的の研究に待つより外仕方のないものであらうと思つてゐる。

しからば何故、その句の價値が永遠性を帯びてゐないか云ふに、人間そのものゝ心の底に深く食ひ入つてゐないからである。たゞ單なる事物を捕へた、軽いユーモアだか、その時代の風俗や習慣を巧に皮肉つたものであるか云ふのに過ぎな

つたために、一時的な大向ふの喝采を博した句であつても時が流れるミ、何の變哲もない句ミなり、遂には句意すら不明瞭なものミなつてしまふのだ。

だから難句の多くは經節のだし殻のやうな味のない句が多い。四苦八苦して句意明瞭ミなつたからミて『ハハアン成程』ミ云へばお終ひである。『ほんに名句だわい』ミ僕達をうならせてくれるやうな難句解に接したこゝがない。

よく寝れば寝るミてのぞく枕蚊帳
そんなこゝ存じませんミ鶴を折り

なごの句は誰にでも句意明瞭である。そして大正の聖代でも矢張り名句たるを失はぬ。

けれども同じ難解百句答案の(三七)

美しいはづ大こくは袋持

は、

踊り子(藝妓)をうけ出しての梵妻、お袋(母親)が付いて居るのは當然であるミの義に飯島花月氏の解

ミ云ふ解釋がついても『なる程そんなものか』ミ云ふ人はあつても『ほんに名句ですね』ミ云ふ人はあるまい。

僕は古句の考證に多くの時間を費されてゐる人々に對して衷心から敬意を表してゐるものであつた。然しながら句意を明瞭ならしめるために、句中の文字を勝手に改めるこゝは默過し難い



川柳塔

竹田芦穂

領事館の仲よくしたい族を立て
油氣のない髪智慧を借りに来る
活きて行くペンに手先の冷ゆるこ
公休日筆笥動かす掃除する
働ねてゐる嫁ごは筆笥知らぬなり
書置きを子供が敷にした哀れ
日當りの寫塲は花の咲く温み
カツフエ！の暇は林檎がよく光り
一面へ腹立ちを書く記者になり
店の灯に反むいて按摩揉み始め
井戸端の話糊屋も口を入れ
またもこの静かになつてバーはしめ
かき船が震ふた様に灯が揺れる

問題である。そは後人によつて、何れが原句であるか不明なる場合が多いからである。

であるから僕は、前掲の(一)(二)の句を「犬を捨て申をかつこむ松ヶ岡」にして、解釋を試みやう。

僕はこの句を一讀した時に直に句意は明瞭であつた。云ふまじ偉さうに聞へるが、そんな意味ではない。現代の句に於て斯うした擬人的表現法の句はかなり多いからである。

「犬」が夫であることも「申」が妻であることも間違ひのない解釋であるが犬を捨てたのは申ではなくて、松ヶ岡が犬を捨て、申を搔つ込んだのである。さるこ云ひ、搔込む云ひ、こつした懸け調は古句にはかなり澤山ある。

「かつこむ」も「驅込む」ではなくて「搔込む」である。「かつこむ」は松ヶ岡の松へも懸つてゐるのかも知れない。斯う考へて來るに、この句は實につまらな

錦繪に追剥の出る路はなし
負ぬ氣の子供相手の店の出ひ
零落れて花輪に酔ふた様に立ち
獨奏は花輪に酔ふた様に立ち

○ 太田徹底郎

勘定の意外をかくす妻楊子
流行らない柄を無口の姉は着て
慰めに南洲に持つ紺緋
順調に行かなくなつて訪ねて来
案内の火種は上る段柳子
薬局への地震秤はまた動き
ウキンドの方を向かずに泣いて見
戸締りをして思ひ切り泣いて見
素つ張り退職をした人戀し
一富士も二鷹も見たに此晦日
また、きをして飛行機を見失ひ

○ 平井光 太一樓

負ふた子の云ふなりにして草臥る
合性かぬよ旦那眞面目なり

い句である。松ケ岡を詠んだ句では、
もつゝ優れた句が幾つもある。穂積博士
の曲解？された句は、句意が明瞭になつ
たミ云ふだけであつて更に幼稚な句ミな
つてしまふ。

あゝした、懸け調の句は古句によくあ
る手法であつて、技巧ミ云へば云へぬこ
もなからうが、大いに臭い技巧である
ミ云はねばならぬ。だから現柳壇の人々
はもう斯うした懸け調なきは用ひない。
右に述べたやうに解釋すれば「を」は
「の」の誤記だらうなきミ思はなくとも
濟む譯である。穂積博士は智者智にたほ
れるの例で、あまりに考へ過ぎられたも
のと思ふ。

僕の解釋ミても要するに、現代の表現
方法からヒントを得て、その時代の句風
ミ、その時代の作者の頭腦を推定して解
釋したのであつて、原作者を捉へて來て
の解釋ではないから僕の解釋が假令信じ
られないからミて別段腹も立たぬ。

阿呆らしい程あらたまる久し振り
 ウィンドへ子供の爲めに立ちに来る
 追ひ付いた所で煙草の火を借りる
 言ふ事に先を越されて色を替へ
 又前ミ同じ手で来る勝將棋
 強いられて下戸盃を斜に受け
 衝立の後に廻る立ち嘶
 お隣で聞けば向ひで遊んでる
 朝起きたまんまで暮る病上がり

○ 西垣松雨

仲裁は鞠つく様な手付きなり
 羅字仕替つたらぬしい障子の開け合
 氣に入らぬらしい障子の開け合
 理に負た丁稚黙つて涙ぐみ

○ 太田一聲

お隣の謠へ膝を叩くこ
 止めのから荷車の重いこ
 車止めの謠へ膝を叩くこ

要するに難解の句を、ウン／＼云つて
 研究したところで、最後はこんなところ
 におさまつてしまふのであるといふこと
 さへ知つて貰へばいいのである。

ヨタリ
 スタ式
無線電話

▼零骨クンの白熱さこ来たたら一寸おそ
 ろしくなる。先づ細クんに命令して曰ク
 『爾今苦駄らぬ小説を讀むな。そんなひ
 まがあれば川柳書を讀め、そして川柳を
 作れ』
 ▼徹底郎クン、長火鉢の前に座
 り込み、頭を抱へて思案久しうしてゐる
 のをながめた細クン『なにか仕事の上で
 間違ひでも出来たのですか』
 『心配さう
 に聞く』
 『イヤ何もそんなことは無い』
 『云ひ切つた儘、相變らず考へ込んでゐる
 ので、細クンはたまらなくなり近所に住
 んでゐる同僚の家へ様子を聞きに出かけ
 るといふ騒ぎ。其あきで「アハハ、ハ、ハ、
 句を考へてゐるのさ』は奮つてゐる▼風

蓄^{たくわ}あ^あ親^{おや}空^{そら}新^{あらた}債^{せき}近^{ちか}懸^か
 音^ねの^の且^{かつ}白^{しろ}世^よ券^{けん}所^{ところ}賞^{しょう}
 機^き養^{やし}那^なの^の界^{かい}を^をか^かを^を
 隣^{りん}子^こ養^{やし}思^し明^{めい}ら^ら當^{あた}
 の^の來^き子^こ子^こ日^{にち}所^{ところ}當^{あた}
 趣^{すい}て^ての^のに^にぬ^ぬ望^{ぼう}し^し
 味^{あじ}か^か前^{まえ}乞^こ人^{ひと}も^も殖^{しょく}て^てる^る
 は^は知^しつ^つて^て居^ゐる^る
 持^もち^ち直^{ちか}り^り
 居^ゐる^る

○ 關 本 雅 幽

吸^{すく}入^{いれ}器^き何^{なに}處^{ところ}か^から^らこ^こなく^く風^{かぜ}が^が來^きる^る
 後^{あと}先^{まへ}に^にな^なつ^つた^た話^わは^は久^くし^し振^ふり^り
 松^{しょう}取^とれ^れて^てか^から^らだ^だん^んく^く恐^{おそ}縮^{ちぢ}し^し
 お^お頼^{たの}み^みの^のあ^ある^る孟^{まう}は^は恐^{おそ}縮^{ちぢ}し^し
 逆^{さか}夢^{ゆめ}に^にし^して^ても^も氣^きに^にな^なる^る針^{はり}仕^し事^{ごと}

○ 吉 川 啞 人

不^ふ催^{もよほ}速^{すみ}溜^{ため}
 斷^つ促^{せま}成^な會^{あひ}に^に來^きて^て同^{どう}情^{じやう}を^をし^して^て歸^{かへ}り^り
 着^きへ^へマ^マント^{ント}を^を着^きせ^せる^る湯^ゆざ^ざめ^め也^{なり}
 息^{いき}は^は月^{つき}給^{たま}日^{にち}ま^まで^で待^{まち}て^てぬ^ぬ金^{かね}
 規^き則^{そく}書^{しよ}が^が二^に度^ど屈^{くつ}ま^ま

人^{ひと}ク^クン、前^{まえ}號^{ごう}の^の樂^{がく}屋^や落^{おち}を^をな^なが^がめ^めて『實^{じつ}際^{さい}
 やつたらよろしうおまんねけき』と暗^{あん}に
 然^{しか}ら^らざる^{ざる}こ^こを^をい^いふ。近^{ちか}く口^{くち}頭^づ辯^{べん}論^{ろん}が開^{ひら}
 か^かれる筈^{はず}、句^くに曰^{いは}ク『色^{いろ}男^{おとこ}孟^{まう}ミ力^{ちから}はな^なか
 りけり』さいふの^のあ^ある^るか^から、こ^これ^れを^を煎^{せん}
 じつめれば金^{かね}ミ力^{ちから}が^があ^あり^りあ^あま^まる^るの^のか^かも^も知^し
 ねぬ▼松^{しょう}雨^うク^クンは^は最^{さい}近^{ちか}に^に二^に十^{じゅう}八^{はち}番^{ばん}の^の札^{ちやく}所^{じよ}
 萬^{まん}集^{じつ}山^{さん}雅^や樂^{らく}多^た寺^{てら}の^の住^{じゆう}職^{しやく}に^にな^なつ^つた。い^いづ^いれ
 經^{きやう}藏^{ざう}に^には^は俳^{はい}諷^{ふう}柳^{りゆう}樽^{そん}が^が一^{いち}杯^{はい}つ^つま^まる^るの^のか^かも^も知^し
 れぬ。▼史^し風^{ふう}ク^クンは^は東^{とう}海^{かい}道^{だう}の^の雲^{うん}助^{すけ}に^にな^なり
 さうだ。東^{とう}京^{きやう}か^から^らハ^ハガ^ガキ^キが^が來^きる^るか^かミ^ミ思^しへ
 ば櫻^{おう}ヶ^ヶ丘^{かみ}か^から^ら來^きる^る。櫻^{おう}ヶ^ヶ丘^{かみ}か^から^ら來^きる^るか^かミ^ミ
 思^しへば東^{とう}京^{きやう}か^から^ら來^きる^る。そ^そし^して東^{とう}京^{きやう}支^し部^ぶこ
 の連^{れん}絡^{らく}係^{けい}に^に就^{しゆう}任^{にん}した。▼古^こ城^{じやう}山^{さん}ク^クンは^は本^{ほん}
 職^{しやく}が^が忙^{まい}が^がし^しく^くな^なつ^つて休^{やす}め^めな^なく^くな^なつ^つた。今^{いま}
 日^ひは幸^{さい}ひ^ひ休^{やす}み^みだ^だか^から道^{だう}頓^{とん}堀^けへ^へも^も出^で掛^かけ
 やうか^かミ^ミ思^しつ^つた^たが本^{ほん}社^{しゃ}へ^へ出^で勤^{きん}し^しま^ました^たこ
 云^いふ。道^{だう}頓^{とん}堀^けよ^よりも兵^{へい}庫^こ縣^{けん}に^にあ^ある^る本^{ほん}社^{しゃ}の^の
 方^{かた}が^が近^{ちか}い^いこ^こい^いふ^ふ譯^{やく}で^であ^ある。コ^こレ^レは^は高^{かう}等^{とう}數^{すう}
 學^{がく}で^でな^なけ^ければ判^{はん}らぬ問^{もん}題^{だい}で^であ^ある▼廣^{くわう}穂^{すい}ク^ク
 ン^ンは靴^{くつ}のお^おツ^ツち^ちや^やん^んこ^こ呼^よば^ばれ^れて^てゐ^いる。い

あれからを考へ直す落し物
 雀はうねしそ
 結局は要領のいゝ奴にされ
 メリヤスに頭の髪がち亂れ
 母らしくなつて電車で乳を出し
 うるさがり乍ら妾宅米をや
 姑の氣のいゝ時を嫁話し

○ 橋本二柳子

都から電燈ついで急ぐなり
 二次會は引張りこんだやうに云ひ
 附馬に仲居二人ついで行き
 美し可愛くないか
 子が可憐ないか
 巡査叱りつけ

○ 松本助六

寫眞帳娘時代の母もあり
 時間表を見直して去ぬ話
 忌中髭夢の話し内に出來

○ 小泉飛水

つでも帆布綿のやうな袍を抱へて忙がし
 さうに本社へ出勤して、先づその袍の口
 を開くからである▼二柳子クンは何時で
 も蘆穂クンに食つゝいて歩いてゐるこ
 ろはまるで鶯鶯である。そして、本社
 の會計課長らしいところを見せてゐる。黙
 つてはゐるがドシ／＼實行して行く男▼
 夜調クンは今まさに戀愛至上主義の最高
 調に達してゐるんださうな。『だいたい
 が過ぎるさ話す樂取』の口にならぬやう
 に警告を發しておく▼路郎センセイ、根
 城を雜誌社に開け渡して、大石良雄を極
 め込んでゐるさ、同人、その部屋を覗き
 込んで曰く『社長室ですか』はい▼神
 戸支部の創立句會に神戸の各吟社が、こ
 ぞつて出席したので幹事の一洲クン、三
 十度五分の川柳熱を出してゐる。イヤ
 鼻息の荒いこ▼洲馬クンはおもむろに
 馬を陣頭に進めるさ云つた風である。流
 石に一方の旗頭である。▼輝翠クンは川
 柳舞翠さした判を原稿にベタ／＼押し

も う 一 度 帯 を 鏡 に 寫 し て 見
失 せ 物 が 出 れ ば 笑 ひ で 事 は す み

○ 山 岡 剛 山

な ぐ さ め に 仲 居 子 供 を 抱 き に 來 る
バ ス ケ ッ ト 兩 手 に 汽 車 の 鑷 が 見 ぬ

() 酒 井 零 骨

聽 診 器 の 靴 お だ け に 打 ち 明 か し
エ ナ ル は じ め て 泣 か した 汽 車 の 窓
母 親 を つ き 付 け て 見 る 檢 温 器
電 燈 の 事 も 忘 れ て 今 日 も 酔 ひ
合 格 の 乳 豆 に 少 し 口 を あ け
奇 應 一 度 聞 い て レ コ ー ド 買 っ た
も う 一 度 聞 い て レ コ ー ド 買 っ た

○ 盛 井 耕 塩

猫 警 戒 は 車 掌 を 知 つ て 呼 び 止 め す
が 戒 は 車 掌 を 知 つ て 呼 び 止 め す

て來る。その堂々たる有様には同人一同
あてられ下曰く「川柳久良岐センセイの
向ふを張るのか子」云。▼かほろクンは
路郎センセイに書を寄せて曰く「川柳を
百句か二百句位作れ？その積りで句をつ
くれこのお言葉ですが……さうも困りま
す。樂天地の燃ゆる渦巻の二十一嵐さん
でん返し見たくてたまりませんのも見
行かず寶塚の菊五郎も見に行かず、後月
二十七日に雪の降つた日でも湯ごうふ平
へも行かず、宅の椽先で酒のかすを焼な
がら……雪見酒、酒のかすミ勝手に題を
出して考へましたが出来ません」ミしか
し熱心なこは仲々熱心なのですさつけ
たして更に曰ク「お宅の道をおんじよう
お教へ下さいませ。私はまだ鳴尾へ行つ
た事がありませんし、他所へ行きますミ
東西南北が解りませんから、よろしく」
だささ。▼柳路クンは、さうく「東京へ
腰を据わした。そして本社のために宣傳
れつさめるこまになつたが震災美人が二

親切が死線を越へて情死沙汰
羞かしい人へ熱燭軽くつきざ
藤椅子を揺すぶつて見る氣の輕さ
貸しボートに乗るのを淋しがり
二人して牛肉五十目仰々し

中川露太樓

咲き出したきつさり金を棄てに來い
待たされる身へ雪が降り雪が降り

原史風

齒磨の無い日續く文化村
酒の上の離縁話は鶉呑され
去り状に泣くは律義な女房なり
此の位置になねばて親死んで居り

岩崎柳路

許嫁私カルピス好きミ言ひ

十圓であるとか云つて、この方面に對する手腕をもほのめかして來た。▼大阪市の電氣局長が變つて角川柳局長が榮轉して來られたので「市電の友」の柳壇が大いに色めき立ち、啞人クンが同誌柳壇の選者となつた。これから八千の讀者に快心の笑みを洩らさせることであらう▼一聲クンは判取狂で全國の官幣大中小社六十餘、各宗本山九十、神社佛閣總計千百餘判取帳數十五六冊に及ぶさうだ。京都だけでも二十六日通ひつめたさうだ。雨が降つても風が吹いてもだから驚く。判取に行つて巡查に追ひ拂はれた珍談までもつてゐるさうな▼無線電信は、このころで通信が杜絶した。

▲夢路氏に

創刊號の『近作柳樽』の末尾に近作柳樽欄で奮つた作家に對して共選組の選を依頼する旨を發表いたして置いた爲めに

祝砲へ一寸驚く傳書鳩
我が室へウツカリノツクしてはるり
地下室へキャビンの様な氣ではるり
インボイスわからぬながら給仕綴じ

○

高橋古城山

折れたわけ聞かされている鼈甲屋
結納へ娘目に付く年になり
辻占に弱い自分が見透かされ
此れしきの事業に息子ビルディング
手土産に面白くない事も聞き
日當りで遊ぶ子供に安心し
金の番さすに養子を撰り好み
此日傘預けて歸る程話し

貴下から自分には、あの欄に投句はいたし
ますが、共選の選者になりたい爲めでは
ない云ふお葉書に接し恐縮いたして居
ります。あれは貴下の如き知名の作家に
對して申し上げたのではなく朝日新聞あ
たりで新進作家を新に世の中へ紹介する
意味で懸賞小説を募るが如く無名作家の
ために一つの登龍門として發表したのに
過ぎません。あの欄を御覽下さればお判
りでせうが金澤の久流美氏なごも出句さ
れて居ります。氏は本誌で個人選をお願
ひしてゐる方です。

貴下の如く卒直にいふて下さる人はい
ゝが、だまつて誤解し不快な感を抱かれ
るごいけないから編輯餘白を藉りて一寸
お答へいたして置きます。それから創刊
號にもおきておきました。本誌は弘く社
會的に川柳宣傳をする重要な使命をもつ
てゐることを御諒解願ひます(路郎生)

編輯太與里

飛行機に、鞍馬に、全國中學校の野球試合に、全國のファンを熱狂させる鳴尾から「川柳雜誌」が生れた。いふことは何んだか、いゝ意味でかつぎたくなる。

「川柳雜誌」によつて天下の鳴尾にした。いゝ思つてゐる。ところが創刊號の發行部數こそ賣れゆきは、斯うした専門雜誌のレコードを突破したので同人一同歡聲をあげて、更に活躍を期してゐる。この調子で行けば「川柳雜誌」の鳴尾が出来あがるのも遠くはあるまい。そんな譯で本號は頁數を増、發行部數を更に増加することにした。讀者諸君も大いに本社の發展力の速かなのを喜んでいただけたい。と同時に本誌を一人でも多く購讀されるやうに勧誘していただきたい。(路郎生)

▼本社の發展は、右に述べられた様に頁數並に發行部數の増加しただけでなく、

東京に支部を設置し、同人としては武田彩霞君黒木葵豆君を迎へました。まだまだ支部も同人も殖ゆる傾向であります。何れきまり次第次號で發表しますから支部の附近の人達は幹事を訪ねて小集その他ここに御盡力を願ひます。

▼二月十八日には第三支部(管寺)の金熊寺吟行がありました。幹事が犠牲的に活動して呉れましたので一日を愉快に暮すことが出来ました。當日は新に本社ノ寫眞部に入社した葵豆君が記念撮影にその妙技を奮つて呉れました。當日の句稿は紙數の關係上止むなく次號に廻すことにしました。

▼久しく御病氣であつた淺井五葉先生が特に本誌のために選句を快諾され、本號にその御選句を發表し得られたことを喜んで居ります。

▼同じく本誌の選者であみ相元紋太先生は目下御病氣だそうで大變心配してゐます。一日も早く快癒されることを祈つて

居ります。

▼啞人君は長男が中耳炎で弱つてゐますこれ又一日も早く癒るやうに。

▼かほる君は一月に華燭の典をあげられました。お祝ひ申しあげます。

▼光太樓君は妹さんが亡くなつたので暫く歸郷されました。お悼み申上げます

▲小泉飛水は大阪市北區西野田茶園町七九四に轉居されて新に商賣を開始されました。お祝申上げます。

▲松本助六、盛井耕鹽の兩君は都合で同人を退かれることになりました。更に復活の日を祈ります。

▼本誌會員、徳田薫石君は双柳、竹内蛸天君は多聞、大和谷、水君は月の輪、改號されました。

▼御送金は精々振替を利用していただけたい。なほ切手代用は、なるべく五厘切手に願ひたい。五錢、十錢の切手は、當方であまり澤山あつても困まるので特に御願ひします。(蘆穂生)

投稿規定

▼句稿は別紙に認め、住所氏名を明記するべし。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」に封筒に朱記するべし。

▼締切は厳守されたし。

▼各地會報は清記のこゝ。

▼用紙は半紙又は同型の野紙に限る。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信封入のこゝ。

募 集

五月號 課題

三月廿五日締切

(各題二十句以内)

- ▲眼病 矢野きん坊選
- ▲叔父 楳元紋太選
- ▲襖 吉川啞人共選
- ▲襖 竹田蘆穗共選

六月號 課題

四月二十日締切

(各題二十句以内)

- ▲別離 坂井久良岐選
- ▲二階 吉本寛汀選
- ▲辭職 高橋古城山共選
- ▲辭職 吉川啞人共選

每 號 募 集

- ▲近作柳樽(句數無制限) 麻生路郎選
- ▲各地柳壇(會報)編輯局選
- ▲文章(評論研究吟行漫文)

價 定

一部	參拾錢
六部	壹圓六拾錢
十二部	參圓

(共稅郵)

料 告 廣

特等一頁	貳拾拾圓
普通一頁	壹拾貳圓
同半頁	貳拾圓
五號一行	壹拾圓

▼御送金は振替口座大阪三一五一四番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直ちに御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てます其の場合には御不在中でも頂けるやうに願ひます但集金郵便には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は簡人宛にしない事

大正十三年三月十日印刷
大正十三年三月十五日發行

第一卷 第一一號
(毎月一回十五日發行)

編輯兼發行印刷人 麻生 幸二郎
兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地
大阪市東區農人町二丁目七番地
印刷所 藤本兄弟社

發行所 川柳雜誌社

振替口座三一五一四番

祝

大矢 錦山

神戸市多聞通五丁目
兎屋雜貨店內

發

小林 義矢 滿

大阪市西區市岡
元町通一丁目四十一

刊

古門 康雄

大阪府岸和田市南町一五六
(雲川)

食料品商 辻井商店

大阪市築港市場

原稿用紙の提供

▲本誌投句用の原稿用紙
頗る低廉におわけいた
します。

□ 十行二十字詰
百枚 廿錢(送費共)
六百枚 壹圓(送費共)

前金でなければ發送しません

川柳雜誌社

古

本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入
電話 南 五 六 二 番

話しながら愉快に本が見られるのが此の店の特長である。主人公藤堂氏はどんな話でも出来る人である。

政治も論ずれば教育も談じ得る人である。頗る好感をもつて人を迎へるから道頓堀邊を御散歩の節は是非

立寄つてあけて下さい。商賣にかけては全く掛引のない人です。(路郎生)

大大阪

櫻ももう咲かう、私等はのびやかな心持に耽つて自由の氣儘に伸びてゆきたい。由來浪花の地は平民文學の發祥地であり享樂地である、拙齋や山陽のやうな學者が大福帳を繰り算盛玉を彈いて居つた時代もあつた、西鶴にしても巢林子の戯曲にしろ不朽のものになつてゐる。私等は正聖代の佳吟を後世に傳ふべき尊き使命の下に生れたものである、慙うした氣分を離れず川柳を愛する諸君と親しく接觸してゆきたい。さうか私等同人の意を諒さしてこの大大阪誌のため旺んに御聲援が願ひたいです(溪花坊)

■大大阪創刊號は春の装ひを凝らして出る
■月刊大大阪は毎號菊半載版六十頁前後の瀟洒な川柳専門誌です
■是非創刊號より貴下の座右にお揃へ置き下さい
■誌代は前金本社振替口座大阪四三四〇九番を御利用の事
■一部郵税共金參拾錢
■半簡年金壹圓七拾錢
■一簡年金參圓參拾錢

大阪市北區老松町三

發行所 大大阪柳川社

電話 北二四五六番
振替大阪四三四〇九番

川柳雜誌社同人（いろは順）

主幹 麻生路郎

岩崎柳路 石井風人
 原史風 橋本二柳子
 西垣松雨 吉川啞人
 太田一聲 太田徹底郎
 高橋かほる 高橋古城山
 竹田蘆穂 武田彩霞
 中川露太樓 宗清夜調
 黒田佳扇 黒木莢豆
 柳川洲馬 山岡剛山
 小泉飛水 酒井零骨
 宮内一洲 平井光太樓
 森田輝翠 關本雅幽

支部所在地

- 第一支部 大阪市四區八條通南小路 幹事 橋本 二柳子
 - 第二支部 大阪市外天下茶屋南下ノ森三五〇 幹事 森 田 輝 翠
 - 第三支部 大阪市外濱寺町下五六〇 幹事 酒 井 零 骨
 - 第四支部 大阪市西區鶴町四丁目第十三號區 幹事 關 本 雅 幽
 - 第五支部 大阪市北區西野田中江町二三三 幹事 小 泉 飛 水
 - 第六支部 大阪市北區澤上江町二九八 幹事 石 井 風 人
 - 第七支部 大阪市外南濱一八二 幹事 西 垣 松 雨
 - 第八支部 神戸市旭通二丁目八三 幹事 宮 内 一 洲
 - 第九支部 山口縣山口町石原小路 幹事 柳 川 洲 馬
 - 第十支部 神戸市兵庫水木通二丁目二九 幹事 中 川 露 太 樓
 - 第十一支部 東京芝區愛宕町一ノ一六大成社内 幹事 岩 崎 柳 路
- 本社幹事 蘆穂(編輯)啞人、古城山(宣傳)二柳子(會計)一聲(廣告)莢豆(寫真)

春の六甲苦樂園



新大観樓大宴會場の設備あり

ラジウム温泉に、散策に

好適の地

紀淡海峡眼下にあり

西宮北方

六甲苦樂園事務所

電話西宮一〇一

◎阪急夙川、阪神香櫨園から自動車の
便があります (十分間)